



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

しらこまひとみ
博多の歴女 **白駒妃登美**

光の当て方を少し変えるだけで、違う世界が見えてくる。歴史にはそんな面白さがありますね。一九七八年に放映されたNHK大河ドラマ「黄金の日」は、私の戦国時代に対するイメージをガラッと変えてくれました。ドラマの主人公は、堺の豪商・呂宋助左衛門（ドラマでは納屋助左衛門という名前で登場）。なんと戦国の英雄・信長も秀吉も、ここでは脇役なんです。

それまで武士の活躍を描いた作品しか知らなかった私は、国内の戦乱を尻目に、海を越えて外国に進出し、経済を動かしているエネルギッシュな商人たちの姿に、そして自由を愛する彼らの自主独立の気概に、胸が熱くなりました。戦国時代とは、地から沸きあがるようなバイタリテイに民が突き動かされた時代でもあったんですね。

そんな時代を象徴するなでしこの一人が、女性芸能の始祖である、出雲阿国です。

❁ 戦国時代にあらわれた新星

——女性芸能の母、出雲阿国

戦国の民のバイタリテイ



阿国は「歌舞伎」のもととなった「かぶき踊り」を始めた女性として知られ、その演技は人々の心を魅了しましたが、彼女の真骨頂は、単なる「役者」表現者〃の域を超えたところにありました。それまで役者といえば男性ばかりだった時代に、女性が男性を演じるという前例のないチャレンジをし、見事に成功させ、現代芸術の一つの型を作ったのですから。彼女はまさに当代随一の売れっ子アーティストであり、名プロデューサーでもあったのです。

もともと歌舞伎とは「かぶく（傾く）」からきており、単にファッションや形にとどまらず、時代への挑戦や斬新な発想といった「精神性」が源になっています。その精神の象徴こそが、出雲阿国と言えるでしょう。

❁ 女性は原始の太陽

戦国時代は、男たちが自分の正義をかざし、覇権を争った時代。正義と正義がぶつ

出雲阿国 安土桃山時代の女性芸能者。一説には、出雲大社の巫女から大社勤進のため諸国を巡回したところ評判になったとされる。「かぶき踊り」の創始者として知られる。

【イメージイラスト】
アオジマイコ